

青梅市文化財ニュース

第 1 7 3 号

平成14年3月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859)

「^{さえず}囀り」を聞く気分

数年前の3月中旬、まだ雪の残る御岳山表参道を登りきって、一息ついていると樹上のスギの茂みから夏鳥のクロツグミの囀りが聞こえてきました。夏鳥の渡来期としてはツバメなどが早く、青梅周辺では3月中旬を過ぎると姿を現します。しかし、大半の夏鳥は4月になってから渡来するものが多いので、「もしかしたら、クロツグミの渡来の最速記録かも知れない」と姿を探すと、それはカケスが複雑なクロツグミの囀りを真似て鳴いていただけでした。

カケス本来の声はゲーとかジャーというダミ声ですが、他の鳥の繊細な声を器用に真似ることがよくあります。こうした他の鳥の鳴き真似を『拾い込み』ということがあります。

鳥の囀りの意味は、繁殖のために異性を引きつけたり、縄張り宣言をするためだといわれます。しかし、キジバトのデデッポーという鳴き方や、ヒヨドリのピーリュリュという巻き舌の声にも囀りとしての機能があるとされますが、普通こうした声は囀りとはいいません。カラスやスズメ、カワラヒワなどの声についても同様です。秋、モズが甲高い声でキチキチキチ…と鳴くのも一種の囀りですが、「高鳴き」とはいうものの囀りとはいいません。

言葉の使い方のうえからは、囀っていても囀らない鳥がいるような印象を受けます。囀りは、メジロ、オオルリ、キビタキなど一般に美しいとされる鳴き声に限るようです。普通使われる囀りという言葉には、生物学的・機能的な意味のほかに、人間にとって心地よく、音楽的である、という主観的な意味合いも含まれます。

俳句に『百千鳥^{ももちどり}』という季語があります。多くの小鳥というだけでなく、春になってたくさんの鳥が群がり、囀るさまや、その鳴き声という意味の言葉ですが、それは、囀りだけではなく野鳥のコーラスというイメージが強くなり、この言葉にも、春の山野で人の耳に心地よく響く鳥たちの声というニュアンスが感じられます。

カケスやモズは、他の鳥の声を巧みに拾い込みます。カケスは鳥だけでなくネコやイヌの声も真似ます。外国でもマネシツグミやヌマヨシキリなどが有名で、ヌマヨシキリの囀りは

(裏面につづく)

ほとんどが他の鳥の拾い込みで構成されているといわれます。なぜ、鳥が他の鳥の声を真似るのか、いろいろ研究もされているのですがその理由にはまだ定説がありません。けれど、何らかの形で囀りのような役割を果たしていると思われます。カケスやモズがいくら巧みに他の鳥の声を真似しても、それを囀りとはいわないのが普通です。「うまい！」と感心させられても、偽物という意識が囀りと呼ばせるのをためらわせるのかも知れません。

鳥は日の長さ（日長）を感じると、雄性ホルモンを分泌して囀り始めます。青梅や奥多摩では大体、節分を過ぎるとホオジロやシジュウカラの囀りが始まります。もし、鳥の声を聞く人の主観的な心理を排することができるならば、囀りや鳴き真似が何か新しい意味を持った鳥の言葉として聞こえてくるかも知れません。

（文責 桜岡 幸治）